

## 対応・工夫【支援体制・校内連携・保護者へのアプローチ・関係機関との連携】

対応・工夫の内容	事例番号
・特別支援教育支援員とは、授業の合間に支援方法を具体的に共有して連携を図った。	事例2
・集団と個のバランスを意識した。集団に働きかけて児童同士が声をかけあったり、励ましたりできるように環境をつくり、それでも難しい児童に対しては個別に支援した。	事例3
・日頃から児童の様子を観察し、行動の理由を考えたり、児童と話して思いを汲み取ったりして、必要な支援をするよう心がけた。	事例4
・支援方法については、通常の学級担任と特別支援学級担任で共通理解を図りながら常に同じ目標に向かって取り組むようにした。	事例4
・保護者との面談を実施し、巡回相談員より授業での気づきを伝えるとともに、関係機関との連携のよさについて説明した。	事例5
・放課後等デイサービス利用後は、相談支援専門員と連携して定期的に担当者会議を行い、学校、家庭、放課後等デイサービスでの取組を共有し、できるようになってきたことや課題について整理しながら、対象児童の将来の姿を見据えた必要な力を育てていくための話し合いを行った。	事例5
・医療機関の受診に関しては、保護者、担任、特別支援教育コーディネーター、巡回相談員とで面談を行った。	事例7
・他校の通級指導教室を利用するとともに、療育で取り組んでいるアンガーマネジメントを学校でも取り入れた。	事例11
・個別指導が必要なときには、理科専科の教師などが指導に入るようにした。	事例11
・児童発達支援センター、放課後等デイサービス、SC、SSWなど、関係機関と連携して対応を協議した。	事例11
・通常の学級に在籍する支援の必要な児童の理解と支援について、2年連続で職員研修を実施した。また保護者に対しても、発達障がい等に対する理解について講話を実施した。	事例11
・支援員は過度の支援を行わず、見守る程度とし、担任の補佐役に回るようにした。担任の動きを見ながら、必要な声かけを行うようにした。	事例12
・自立活動の個別の指導計画を策定する際、通級担当者、支援員、学年の特別支援教育コーディネーターだけでは、自立活動で取り組むべき中心課題を見出すことが難しかったため、担任も一緒に取り組んだ。	事例14
<p>○巡回相談での支援</p> <p>①ケース会議</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学時に、担当職員が、主治医から病状説明を受けた。</li> <li>・特別支援学校のコーディネーターは、基本的支援や環境整備についての指導助言を行い、継続的に支援の状況を確認した。</li> </ul>	事例15

<p>②進路と福祉サービスについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・進学に向けて、進学先でのサポートや福祉サービス利用について、特別支援学校のコーディネーターから説明を行った。</li> </ul>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ソーシャルスキルトレーニング（以下 SST）実施に向けて、担任が自分なりに SST のイメージを持ちたいと思い、特別支援学校高等部の SST の授業参観をした。「あたまと心で考えよう SST ワークシート思春期編」を活用したコミュニケーションスキルを身につける自立活動の授業参観をした。</li> </ul>	事例16
<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝は家で一人になると携帯電話を触るため、母の出勤時、一緒に家を出るようにした。</li> </ul>	事例17
<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任以外の教科担当教員とは、対象生徒の状況について情報共有を行い、共通理解を図った。</li> </ul>	事例17
<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象生徒の現状を保護者と共有するための面談を、対象生徒と保護者、担任、特別支援教育コーディネーター、進路担当とで行った。また、進路希望先に、キャリアサポーターが対象生徒について説明等を行った。</li> </ul>	事例18
<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象生徒への支援の在り方については、校内支援委員会や生徒理解研修で職員に共有した。</li> </ul>	事例18
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の様子等に関する情報提供書を作成し、医療機関に情報提供を行った。</li> </ul>	事例18
<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象児童の発言を温かく受け止める雰囲気、指導すべきところはきちっと指導する態度を心掛けた。</li> </ul>	事例19
<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校では、特別支援教育コーディネーターが中心になり、生徒指導部や人権教育担当と内容や方法、時期等を計画され、全校集会や学年集会等でソーシャルスキルトレーニングの活動を実践した。</li> <li>・小中学校では定期的な合同職員研修会で、特別支援教育について情報共有した。（国立特別支援教育総合研究所の SSST に関する事例紹介）</li> </ul>	事例21
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「生徒支援会議」「教育支援会議」「教育相談」「関係機関との連絡・調整」「研修復講」「カウンセリング」「基礎学力向上プロジェクト」などを行っている。</li> </ul>	事例22
<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎年、指導支援についてのマニュアルを作成。一般的な特別支援教育の基礎に関することから校内で個別対応が必要になる生徒の情報まで記載し、ナンバリングして全職員（事務職、バス運転手等）に配布し、職員がすぐに確認できるようにしている。毎年検討し、ブラッシュアップしている。</li> </ul>	事例22
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「教師の姿（生徒へのかかわり方等）が生徒の行動のモデルになる」を合言葉に、生徒への対応について機会を捉えて校内で考えるようにしている。</li> </ul>	事例22
<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校までの「手厚い支援」を望まれる保護者もいるが、本人が自分の人生を切り開いていく上での過不足のない支援とはどのようなことかなどについて、丁寧に話しながら合理的配慮を決定する。</li> </ul>	事例22
<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業後に利用できる行政サービス（手帳保持者）や関係機関の紹介を行っている。</li> </ul>	事例22
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「引き算の支援」をキーワードにして、支援方法を考えている。支援ありきではなく、生</li> </ul>	事例22

<p>徒自身が困難さと向き合い、よりよく対処できる方策を共に考え、日常的に実践できるように指導することで、自信につなげている。</p>	
---	--